



Title	古墳時代前期における円筒埴輪と円筒形器台の展開
Author(s)	金澤, 雄太
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 261-274
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105045
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古墳時代前期における円筒埴輪と円筒形器台の展開

金澤 雄太

はじめに

古墳時代の始まりから程なく、大和に拠点を置いたヤマト政権によって生み出された円筒埴輪は、古墳時代前期のうちから列島の広範囲に広がっていくことが各地の出土事例によって明らかになっている。しかし、各地における埴輪の受容は、それら地域とヤマト政権の関係性が強まったという漠然とした評価に留まっていることが多く、その受容の背景にあったであろう各地域ごとの個別の状況について具体的に論じている研究は少ない。

筆者は、そういった問題意識のもと、地域ごとの埴輪受容過程の多様性を資料に即して明らかにし、埴輪の拡散という考古学的事象が内包する当時の社会関係をより具体的に明らかにしたいと考え、資料状況に恵まれる讃岐地域を対象にケーススタディを行った（金澤 2018）。本稿では、その問題意識の延長として丹後以西の日本海沿岸と一部播磨の事例を対象に検討を行いたい。当該地域は、古墳時代前期の円筒埴輪の出土事例は決して多くないものの、古墳上で用いられる円筒形器台^①と呼ばれる特徴的な土器が存在することが知られている。それら土器の展開と合わせて円筒埴輪の展開を検討することで、当該地域における埴輪受容過程の実態に迫っていきたい。

1. 研究史と課題

本稿で扱う時期、地域の円筒埴輪や円筒形器台に関する研究は、基本的にそれぞれ個別に進められてきている。そのため、ここではまずそれぞれの研究史の概略をまとめ、本稿の課題を明らかにしておきたい。

円筒埴輪に関する研究 古墳時代前期の当該地域における円筒埴輪の研究はおおむね地域ごとに進められているが、ここでは各地域の1つ1つの研究に触れる余裕がないため、本稿の論旨に特に関わる研究に限定して触れることとする。

丹後地域は、蛭子山1号墳、網野銚子山古墳、神明山古墳といった巨大前方後円墳が存在することに加え、丹後型円筒埴輪と呼ばれる独自色の強い埴輪の存在もあり、比較的議論が活発に行われている地域である（佐藤 2000、高橋 1997 など）。特に丹後型円筒埴輪の変遷や成立

に関して言及されることが多く、山陰地域との影響関係が指摘されることも多い。近年では辻川哲朗が円筒型器台に含まれる資料にも触れながら地域内における埴輪の変遷や影響関係について詳細に論じている（辻川 2008・2017）。

山陰地域は、以前まで古墳時代前期の埴輪資料が少なく、資料紹介程度に触れられる程度が多かったが、新たな発掘資料の増加や既存資料の再整理作業などが進んだことで、円筒埴輪を通した地域内や地域間の関係性について言及されるようになってきている。特に山陰の中でも東側、因幡・伯耆地域については、東方仁史による因幡型円筒埴輪の提唱以降、隣接する丹後地域との関係も含めて議論が進められている（東方 2006・2010）。出雲地域については、椿真治によって通時的な埴輪の変遷を示す中で前期の資料にも触れられ、その系譜についても言及されている（椿 2008）。

円筒形器台に関する研究 初期の円筒形器台の研究は、外面に施文される文様などの要素をもとにこれら資料群を1つのグループとして捉える考え方が主流であり、「山陰系特殊埴輪」と呼んだ石野博信（石野 1976）や、そのまとまりを追認した古川登（古川 1998）、吉備地域からの影響で「山陰型特殊器台形埴輪」が成立したと考える宇垣匡雅（宇垣 1984）の研究などがある。

そのようななか、東森市良と大谷晃二は、円筒形器台の集成を行い、文様の変化から各資料の先後関係について初めて詳細な考察を行っている（東森・大谷 1999）。そこで東森らは、従来1つのグループとして捉えられてきた円筒形器台も細かな形態や製作技法を考慮すると、必ずしも1つのグループとして捉えられない多様性が存在するという重要な指摘を行うとともに、山陰地域における円筒埴輪の受容に先立って成立した地域的な墳墓祭祀具の一種と評価している。

その後、円筒形器台に対する型式学的な検討が試みられるようになり、藤田憲司は形態の変化から円筒形器台の変遷を捉え、その成立に吉備型特殊器台の影響を想定し、系譜論へ考察を進めている（藤田 2006）。最近では、奥山貴が、円筒形器台の悉皆的な集成を行い、口縁部と底部の分類の組み合わせにより、円筒形器台そのものによる自律的な編年を提示している（奥山 2010）。そこで奥山は、細部の形態的特徴の類似から円筒形器台の成立に向木見型特殊器台からの影響を想定している。

課題と本稿の視点 以上、本稿に関連する研究史の概要を整理した。個別地域における各資料の位置付けについて大きな異論はないが、これらの研究がおおむね地域単位で議論が終わってしまっており、地域間の関係に言及する際も隣接地域との関係に限定されがちなところに課題があると考えられる。当該期は、ヤマト政権の地方への影響が時期を経るごとに変化する時期であり、そのような変化の実態を捉えるには個別地域を超えた埴輪受容過程の比較が必要になると考える。

円筒形器台に関する研究については、奥山により個別資料の型式学的検討が深化され、系譜

の理解などに若干の異論は残るものの、おおむね妥当な変遷観が示されていると考える⁽²⁾。しかし、資料数が限定的であることで地域を跨いだ議論はなされているものの、同じ墳墓祭祀の道具である円筒埴輪の展開と関連させた議論が少ない点に課題があると考えられる。

以上の点を課題と捉え、本稿では円筒埴輪と円筒形器台が地域を跨いでどのような展開を見せるのかを検討するため、日本海沿岸諸地域、具体的には出雲、伯耆、因幡、

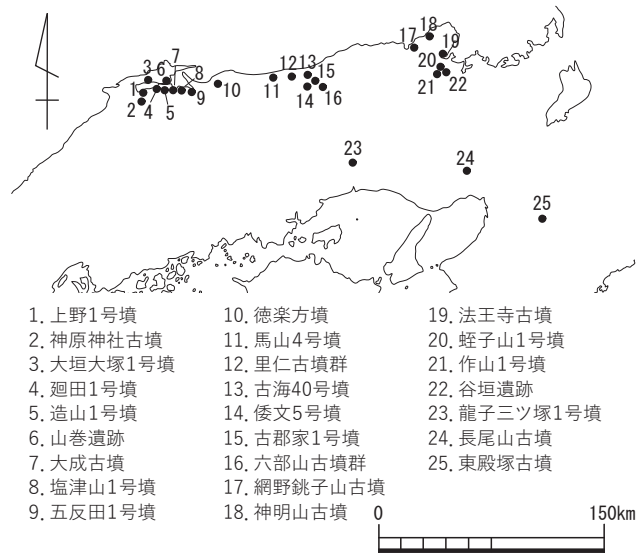


図1 対象古墳分布図

表1 対象古墳一覧

地域	古墳・遺跡名	所在地	墳形	墳長 (m)	器種	埴輪編年	使用方法	備考
出雲	山巻遺跡	島根県松江市	—	—	器台	埴輪以前	—	古相竹管
	神原神社	島根県雲南市	方	29 × 25	器台	I 中	埴頂破砕	船載A、小谷2
	大成	島根県安来市	方	60 ?	器台	I 中	埴頂破砕	小谷2、新相竹管
	塩津山1号	島根県安来市	方	25	器台	I 新	土器棺	小谷3新、古相竹管
	造山1号	島根県安来市	方	60	器台	I 新	土器棺	仿製I c、小谷4
	廻田1号	島根県松江市	方円	58	円筒・鰭付	II	破砕?	小谷3新
	上野1号	島根県松江市	円	40	円筒・朝顔・鰭付	II	破砕?・埴輪棺	小谷4
	五反田1号	島根県安来市	円	25	円筒・朝顔	II	破砕?	
伯耆	大垣大塚1号	島根県松江市	円	54	円筒	II	埴輪棺	
	徳楽	鳥取県大山町	四隅	20	器台	埴輪以前	埴頂破砕	古相竹管
因幡	馬山4号	鳥取県湯梨浜町	方円	100	円筒・朝顔	II	樹立?・埴輪棺	船載D
	倭文5号	鳥取県鳥取市	方	18 × 14	円筒	I 新	埴輪棺	極狭口縁、小谷3新
	六部山3号	鳥取県鳥取市	方円	63	因幡型	II	埴輪棺	
	六部山46号	鳥取県鳥取市	円	9	因幡型	II	埴輪棺	小谷3新
	古海40号	鳥取県鳥取市	円	18	円筒	II	埴輪棺	小谷4
	六部山45号	鳥取県鳥取市	円	18	因幡型	II	埴輪棺	大角山
	古郡家1号	鳥取県鳥取市	方円	90	因幡型・朝顔・家	II	樹立?	鉄鍬、大角山
	里仁32号	鳥取県鳥取市	方	14	円筒・因幡型・鰭付・壺・家	II	埴輪棺	
丹後	里仁33号	鳥取県鳥取市	方	14	円筒・鰭付	II	埴輪棺	
	谷垣遺跡	京都府与謝野町	—	—	器台	I 中	土器棺	小谷3古、新相竹管
	蛭子山1号 (作山1号)	京都府与謝野町	方円	145	朝顔・丹後型・家・甲冑・鶏	I 新	樹立・埴輪棺	舟形石棺、小谷3新
	法王寺	京都府与謝野町	方円	74	朝顔・丹後型・家	II	樹立?・埴輪棺	
	網野銚子山	京都府京丹後市	方円	201	丹後型	II	樹立	
播磨	神明山	京都府京丹後市	方円	190	丹後型・家・盾・蓋	II	—	小谷4
	龍子三ツ塚1号	兵庫県たつの市	方円	36	器台	I 中	埴頂囲繞	船載D、小谷3古

・埴輪編年は廣瀬 2015 に依る。備考欄には時期比定の参考資料を挙げ、土器は松山 2018、青銅鏡は福永 2005 を参照。

丹後地域に加え、円筒形器台が出土している播磨地域を対象に分析を行いたい（図1）。対象とする時期は古墳時代前期であるが、廣瀬寛による円筒埴輪編年Ⅱ期までを対象とする（廣瀬2015）⁽³⁾。円筒形器台出土古墳の時期を埴輪編年に置き換える際は、共伴する土器や副葬品によって行うこととし、土器の編年については松山智弘の論（松山2018）を、副葬品の編年については岩本崇の論（岩本2018）を参照した。

2. 円筒埴輪と円筒形器台の分布状況の変化

以下、時期ごとの資料の分布状況について述べていく。

円筒埴輪出現以前（図2） 円筒埴輪の出現に先立つ円筒形器台と考えられる資料が鳥取県大山町徳楽方墳（墳丘墓）で出土している（図6-1～4）。島根県松江市山巻遺跡出土例（図6-5～7）も形態や施文の類似から同時期とみられ、出雲や伯耆といった地域において円筒形器台を用いた墳墓祭祀が古墳時代の直前ごろから行われていたことがわかる。

円筒埴輪Ⅰ期中相（図3） 今のところ、Ⅰ期古相に該当する円筒埴輪や円筒形器台の出土は

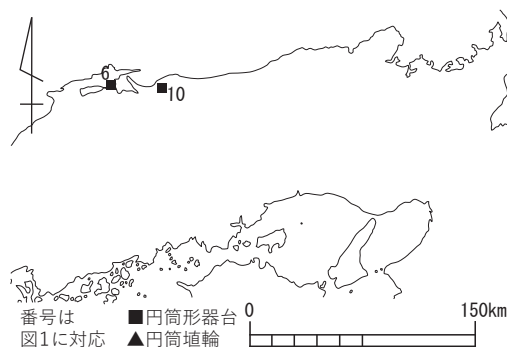


図2 円筒埴輪と円筒形器台の分布図
(埴輪出現以前)

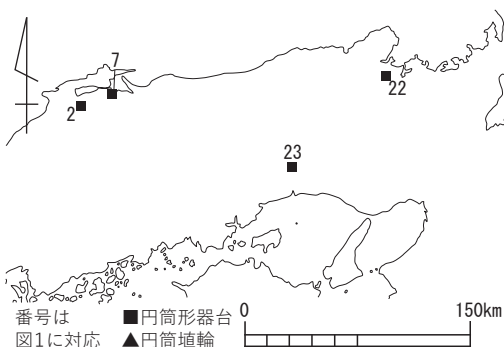


図3 円筒埴輪と円筒形器台の分布図
(Ⅰ期中相)

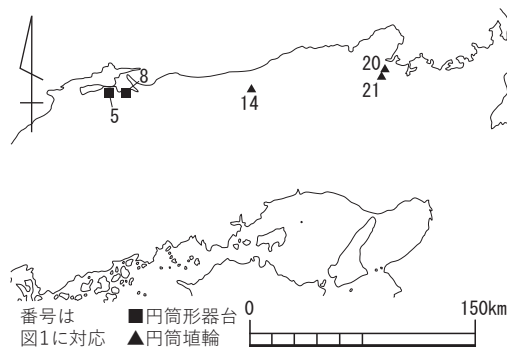


図4 円筒埴輪と円筒形器台の分布図
(Ⅰ期新相)

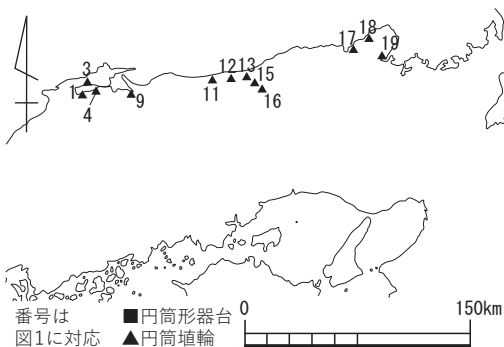


図5 円筒埴輪と円筒形器台の分布図
(Ⅱ期)

確認できていない。I 期中相においても確実な円筒埴輪の資料はみつかっていないが、円筒形器台については広範な地域で出土している。

出雲地域では、安来市大成古墳（図 6－8～11）や雲南市神原神社古墳（図 6－12）で円筒形器台が確認されている。大成古墳の資料は、残りが悪く全形や調整の細部が不明確であるが、脚部や新相竹管文（松山 2018）を有し、小谷 2 段階に比定されている。神原神社古墳の資料は、外面に鋸歯文を施す複合口縁や脚部を持たない裾広がりの底部を有し、製作方法がやや簡略化した様相をみせる。

播磨地域では、兵庫県たつの市龍子三ツ塚 1 号墳（図 6－13・14）において円筒形器台が出土している。この資料は、裾広がりの底部を有し、櫛描文で区画した胴部に方形スカシを配置するといった点で神原神社古墳出土例に類似するものの、口縁部が単口縁になるなどの省略がさらに進んだ事例といえる。円筒埴輪編年では同段階となるが、出土土器も小谷 3 古段階と神原神社古墳よりも若干新しいため、I 期中相内の先後関係として捉えられる事例といえる。

丹後地域では、京都府与謝野町谷垣遺跡（図 7－1）において円筒形器台が出土している。この資料は、新相竹管文が施された複合口縁に裾広がりの底部を有し、胴部を突出の高い突帯で区画する特徴的な資料である。工事中の不時発見による資料のため（田中 1982）、共伴する

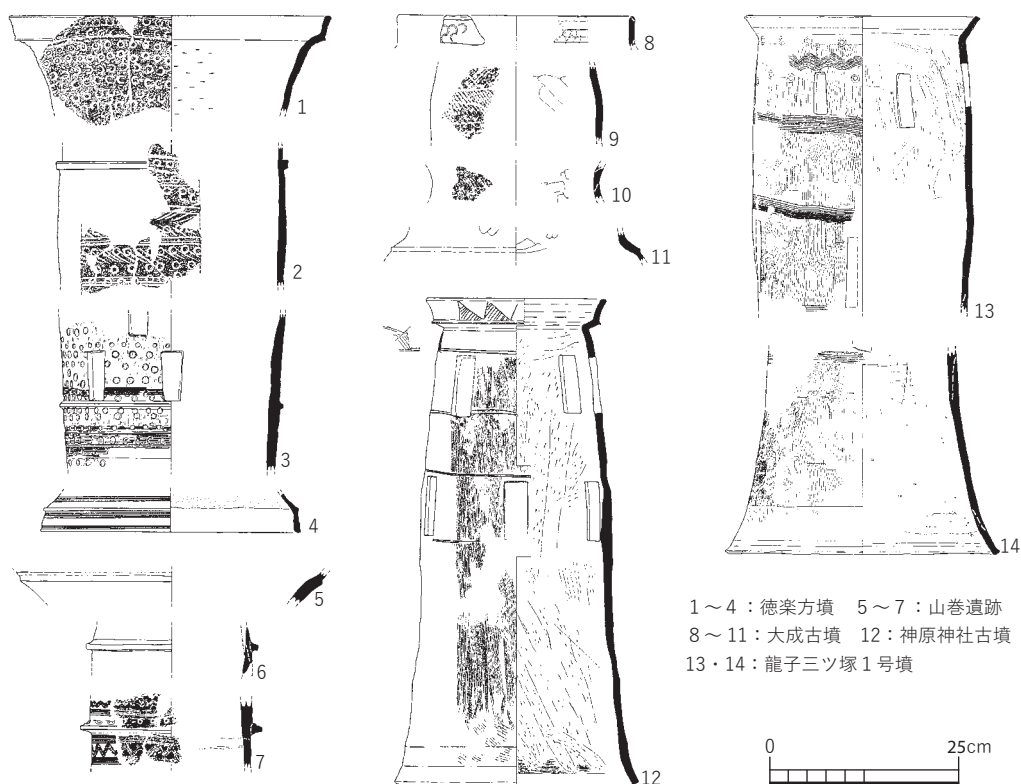


図 6 円筒形器台実測図

遺物は認められないものの新相竹管文を有することや、遺跡に隣接する温江丸山古墳において舶載三角縁神獣鏡などが出土していることを考慮に入れると、Ⅰ期中相という時期比定に大過はないものとみられる。

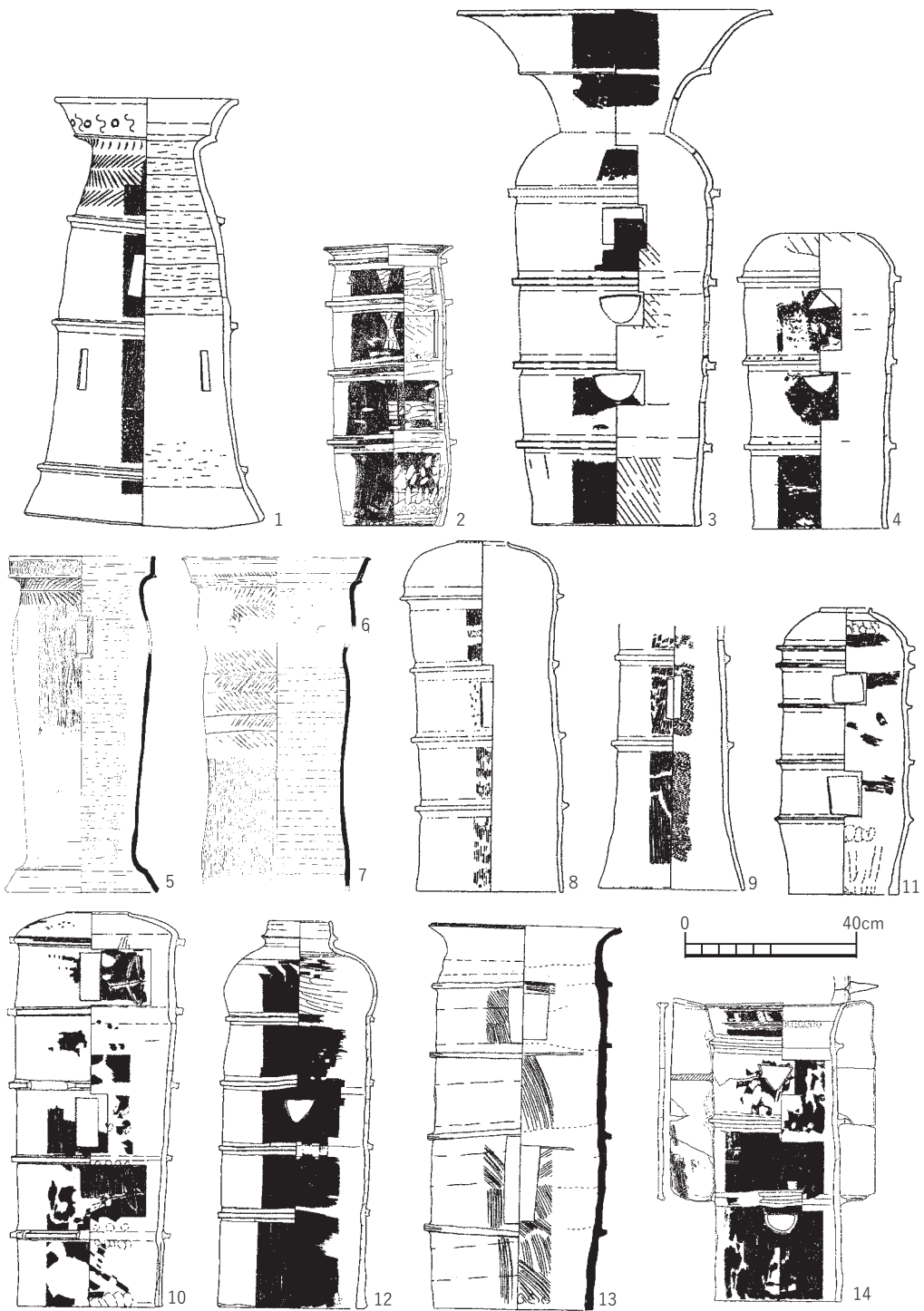
このように、円筒形器台はⅠ期中相になると出雲を中心としながらも近畿地方縁辺部にまで分布を広げていることがわかる。播磨や丹後といった地域では、当該期に溯る円筒埴輪の事例はなく、出雲をはじめとした山陰地域との交流の一端が表れているものと評価できる。

円筒埴輪Ⅰ期新相（図4） Ⅰ期新相になると、ようやく円筒埴輪の確実な事例が出土するようになる。因幡地域の鳥取県鳥取市倭文5号墳では、1点のみの出土ではあるものの、埴輪棺という使用状況であったため全形のわかる当該期の円筒埴輪が出土している（図7-2）。この資料は、3条4段の小型普通円筒埴輪で、口縁部の高さが3.5cm弱を測る極狭口縁を有する。突帯間隔設定技法の円形刺突が認められ、スカシ孔は三角形、方形、分銅形をそれぞれ1段中に3つ設ける。スカシ孔の形状などやや在地化した要素も認められるものの、政権中枢における埴輪の作り方を踏まえた資料と評価できる。

丹後地域では、墳長145mの前方後円墳である与謝野町蛭子山1号墳において朝顔形や丹後型といった円筒埴輪、複数種類の形象埴輪が出土している（図7-3・4）。全形を復元できる円筒埴輪をみると、3条4段もしくは2条3段の小型品で、体部に三角形、半円形、鋸形のスカシ孔を1段中に4つ設ける。丹後型という独自形態の埴輪を製作しているものの、突帯間隔設定技法といった政権中枢の製作技法をしっかりと踏まえた作りをしている点は非常に興味深い。なお、蛭子山1号墳に隣接する作山1号墳に関しても、埴輪の形態や作りが共通するため同時期の所産と考えられる。

出雲地域では安来市塩津山1号墳（図7-5）や造山1号墳（図7-6・7）において円筒形器台がこの時期にも用いられている。塩津山1号墳の資料は、棺として用いられていたため全形のわかる好資料で、古相竹管文を施す有段口縁に明確な脚部を有する。一見すると形態上の特徴は古く見えるが、古墳から出土した土器は小谷3新段階であり、円筒形器台の型式学的変遷と土器編年に齟齬が生じていることを奥山も述べている（奥山2010）。本資料が土器棺であることがそういった齟齬を解消する根拠になる可能性も考えられるが、そのように考えた場合、当資料が数十年程度も器形を保った状態で何処かに樹立されていた状況を想定することになり、後述するような当地域における墳墓祭祀の有り様との齟齬が生じることとなる。この点に関する成案はまだ持ち合わせていないが、本資料の胴部に設けられた方形スカシが1段のみであることや、脚部の作り方が当該期の壺や甕の口縁部の作り方に類似しているように見受けられ、徳楽方墳でみられる脚部とは明らかに異なることを踏まえると、本資料の型式学的検討に再考の余地が残されている可能性も十分に考えられよう。

造山1号墳の資料は、粗くやや乱雑な羽状文が施された複合口縁をもち、胴部には方形スカ



1：谷垣遺跡 2：倭文5号墳 3・4：蛭子山1号墳 5：塩津山1号墳 6・7：造山1号墳 8・9：法王寺古墳
10：網野銚子山古墳 11：六部山3号墳 12：六部山45号墳 13：馬山4号墳 14：上野1号墳

図7 円筒埴輪・円筒形器台実測図

シを有するが多段配置にはならない可能性が高い。底部の資料はないため、脚部を有するか裾広がり底部になるかは現状で定かではない。共伴する土器が小谷4段階であり、出土鏡などからもⅠ期新相に併行する資料と判断できる。

このようにⅠ期新相になると、前時期では広範な分布を示していた円筒形土器の分布が出雲地域のみとなり、その空いた隙間を埋めるかのように政権中枢の製作技法を踏まえた円筒埴輪が分布するようになる。

Ⅱ 期 (図5) Ⅱ期になるとさらに状況は変化し、円筒形器台は出雲地域においても認められなくなり、丹後、因幡、伯耆、出雲のいずれの地域においても政権中枢からの直接的な影響が看取される円筒埴輪が分布するようになる。

事例数が途端に増加するため個別資料の説明は割愛するが、丹後地域では与謝野町法王寺古墳(図7-8・9)、京丹後市網野銚子山古墳(図7-10)、同神明山古墳、因幡地域では鳥取市六部山3号墳(図7-11)、45号墳(図7-12)、46号墳、同里仁32号墳、33号墳、同古海40号墳、同古郡家1号墳、伯耆地域では湯梨浜町馬山4号墳(図7-13)、出雲地域では松江市上野1号墳(図7-14)、同廻田1号墳、同大垣大塚1号墳、安来市五反田1号墳があげられる。個々の地域で埴輪の様相は異なっており、丹後地域では蛭子山1号墳に続く丹後型円筒埴輪が製作され、隣の因幡地域においても時期的に先行する丹後型円筒埴輪から影響を受けたと考えられる因幡型円筒埴輪が作られるようになる。出雲地域では鱗付円筒埴輪が一定の広がりを見せ、因幡地域の里仁古墳群では因幡型の鱗付円筒埴輪がみられるなど東西の地域間交流を窺わせる内容となっている。つまり、山陰諸地域に政権中枢からの斉一的な影響が及んだというわけではなく、各地域ごとの独立性を強く維持した状態で政権中枢と個々に繋がりを構築していた状況が想定できる。

小 結 以上、時期ごとの円筒埴輪と円筒形器台の分布状況の変化を見てきた。円筒形器台は出雲地域周辺で成立したのち、Ⅰ期中相には丹後や播磨といったかなり遠隔地にまで製作者が移動していたと考えられるが、その状況は長く続かず、Ⅰ期新相には再び出雲地域のみ分布に縮小し、Ⅱ期以降には認められなくなる。そして、それに変わるような形でⅠ期新相に円筒埴輪が政権中枢からの影響のもと山陰東部地域に分布するようになり、Ⅱ期には出雲地域を含む範囲で円筒埴輪が一般化していくという流れが想定できる。

3. 形態、製作技法からみた円筒埴輪と円筒形器台の交流

続いて、形態や製作技法の視点から両器種の影響関係について考えたい。

円筒形器台は、吉備型特殊器台からの影響のもとに成立したため、製作技法についても基本的に吉備型特殊器台のそれを継承している。特に内面全体のヨコケズリは器種が存在する全時

期を通して貫徹され、竹管文、羽状文の施文という山陰地域の土器にみられる特徴と合わさって、円筒埴輪と区別する指標ともなっている。形態についても特殊器台の影響による脚部を有し、省力化が進んだ資料であっても裾広がり底部を持つ。スカシ孔が方形主体となる点も特徴といえようか。

このような円筒形器台の諸特徴から外れる資料として神原神社古墳の資料がある。報告書の中でも記されている通り、器形は明確な円筒形器台でありながら、内面調整はタテケズリを基調とし、口縁部に鋸歯文を施し、一部に三角形スカシ孔が存在する点で通有の円筒形器台と異なっている。事例数が多くないため推論の域を出ないが、これらの要素は円筒埴輪の中でも都月型円筒埴輪によくみられる要素であり、その製作技術を用いて円筒形器台が作られているとするならば、製作技術の伝習を伴う直接的な交流が存在したと考えることができる。技術は受け入れつつも独自の形態を志向する姿は、丹後型円筒埴輪の在り方にも通じ興味深い。

上記のような事象とは逆に、近畿地方の円筒埴輪に円筒形器台の要素が認められる事例もいくつか認められる。政権中枢に近いところではⅠ期中相に位置付けられる奈良県天理市東殿塚古墳において裾広がり器形をもつ円筒埴輪が複数種認められる。これらの製作技法は、円筒埴輪のなかで変化する技法の範疇にあるとみられ、あくまでも形態要素に限定された影響と考えられる。また円筒埴輪は、円筒形器台と同じ吉備型特殊器台を祖型にもつものの、直接的な祖型が宮山型特殊器台であるため、スカシ孔の形状は巴形や三角形を基調としている。しかし、東殿塚古墳ではそれら円筒埴輪に一般的なスカシ孔形状に加えていち早く方形スカシが採用されており、そこに円筒形器台からの影響を読み取ることができるかもしれない。他にも有段口縁の二次口縁部が外反し伸長する点も山陰地域の土器の影響とも評価できる。

兵庫県宝塚市長尾山古墳は、東殿塚古墳と併行するⅠ期中相の前方後円墳であるが、出土した円筒埴輪の底部のなかに裾広がりものが認められ、当該期の埴輪の中では底部高が非常に高いという特徴が認められる。製作技法の点では内面ケズリを多用するものの、その方向はヨコとタテがどちらもみられ、上部の形態的には円筒埴輪の範疇で捉えるべき資料と考えるが、両器種それぞれからの影響が絶妙なバランスで成り立っている資料といえるかもしれない。

このように、円筒埴輪と円筒形器台はそれぞれに軸となる形態や製作技法がありつつも、Ⅰ期中相にはかなり広範に人や情報が行き交い、それぞれに影響を与え合っていたと考えられる。

Ⅰ期新相以降になると両器種間の影響関係はほとんど見られなくなるが、Ⅱ期の丹後地域では法王寺古墳において裾広がり底部をもつ円筒埴輪が出土している。製作技法は完全に円筒埴輪のそれであり、形態に関する情報がわずかに残存したものとみられる。

4. 使用方法からみた円筒埴輪と円筒形器台

最後に、両器種がどのような使われ方をしているのかを検討し、円筒埴輪が山陰地域に広がっていく状況の具体像に迫りたい。

まず円筒形器台であるが、徳楽方墳や大成古墳、神原神社古墳は埋葬施設上での破碎供献、塩津山1号墳や谷垣遺跡は土器棺、造山1号墳は石棺の被覆が使用法として想定されている。このように円筒形器台は、土器棺例を除くと時期差に関わらず最終的に破碎して埋葬施設上に配置することを本義としているが、東に離れた分布を示す龍子三ツ塚1号墳では、東四国地域からの影響を受けた墳頂上への圍繞配列が想定され（大澤 2010）、その使用方法に変化が認められる。

円筒埴輪については、Ⅰ期新相の蛭子山1号墳（作山1号墳）では政権中枢における通有の埴丘樹立が確認できる一方で埴丘周囲における埴輪棺としての利用も多く認められ、因幡地域の倭文5号墳では埴輪棺として利用されている資料のみで、実際の使用状況についてはよくわかっていない。Ⅱ期になると、丹後地域では網野銚子山古墳などで埴丘樹立が継続する一方で法王寺古墳のように埴輪棺としての使用も依然認められる。因幡地域では、六部山古墳群と里仁古墳群で埴丘樹立や埴輪棺、古海40号墳で埴輪棺、古郡家1号墳で埴丘樹立が想定される。伯耆地域では、馬山4号墳において埴丘樹立と埴輪棺という使用法が確認できる。出雲地域では、上野1号墳と大垣大塚1号墳で埴丘樹立と埴輪棺、廻田1号墳と五反田1号墳で埴丘樹立が想定されている。

この状況を見ると、いずれの地域、時期においても埴輪棺としての使用が非常に多いことがまず指摘できる。これは今までにも指摘されていることではあるが、日本海沿岸地域の古墳における多量の副次埋葬という政権中枢ではあまりみられない現象であり、別途検討が必要な問題といえる。

そして、これらの地域においても埴丘への樹立という政権中枢における一般的な使用方法が想定されているが、これらの中で確実に埴輪の樹立痕跡が明らかになっているのは丹後地域の事例のみであり、因幡地域以西ではあくまでも埴丘上からの一定量の埴輪の出土や採集から埴丘上への樹立を想定されている状態である。この点に関連して、川原和人は、出雲地域の五反田1号墳や上野1号墳にみられる埴輪細片の満遍ない埴丘上からの出土について、埴丘に樹立されたものが流出した状況ではなく、墳墓祭祀に使用された円筒埴輪を祭祀後に破碎し埴丘上にばら撒いた結果ではないかと推測している（川原 2014）。検証が難しい部分もあるが、廻田1号墳についても比較的似た出土状況となっていることを積極的に捉えると、少なくとも出雲地域においては、円筒埴輪の導入＝政権中枢の祭祀体系の受容、とはなっておらず、あくまで

もハード面のみの導入でソフト面は自らの地域の伝統的な祭祀内容に根付いていたと評価することができる。

5. むすびにかえて

以上3節にわたって古墳時代前期の円筒埴輪と円筒形器台の展開について考察を行った。両器種の時期ごとの分布状況からは、I期中相における円筒形器台の分布域の拡大とI期新相における縮小、そしてそれに対応するかのようなI期新相からII期にかけての円筒埴輪の分布域の段階的な拡大が見てとれた。

形態や製作技法から両器種の影響関係をみた結果、円筒形器台の分布域が広がるI期中相において形態や製作技法の双方向的な影響関係が存在することが明らかとなった。しかし、その影響関係は継続していかず、II期の丹後地域の円筒埴輪に若干円筒形器台の形態的特徴が残る程度の微弱なものとなるようである。

古墳における使用方法から両器種をみると、円筒形器台は龍子三ツ塚1号墳を除くと土器棺や古墳上での破砕供献が主たる使用法となっていた。円筒埴輪をみると丹後地域では政権中枢でも一般的な墳丘への樹立が確認できるものの、それ以外の地域では墳丘への樹立を明確にできるものは今のところなく、むしろ出雲地域では円筒形器台と同様に古墳上への破砕供献が行われている可能性が考えられた。加えて、丹後を含む全ての地域で埴輪棺としての利用が顕著であることも再確認できた。

これらの点を総合すると、I期中相までは出雲地域を中心とした円筒形器台を用いる独自の動きが日本海沿岸部を中心に見られ、ヤマト政権とも相互に影響を与える関係性を築いていたが、I期新相以降、ヤマト政権が使用する円筒埴輪が徐々に当該地域に広がっていき、II期には出雲地域を含む全体を覆うような状況となる。ただし、その実態は決してヤマト政権による古墳上での祭祀をそのまま受容したものではなく、出雲地域はあくまでもハードとしての埴輪の受容にとどまり、ソフト面は自らの古墳上祭祀を継続しているという複雑な実態として理解ができた。

筆者が以前行った讃岐における円筒埴輪の受容過程に関する分析結果（金澤2018）とは大きく異なる状況であり、こういった地域ごとの分析を積み上げることで、古墳時代前期における埴輪受容過程の実態に今後も迫っていきたい。

謝 辞

福永伸哉先生、このたびはご退任おめでとうございます。考古学研究室在籍中はもちろんのこと、大学サークルである考古学研究会の活動などにおいても様々に叱咤激励をいただき、その1つ1つの積み重ねが今の自分を支えていると年々実感しているところです。これからもお身体に気をつけて、益々活躍されることをお祈りするとともに、今後も変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう、お願い申し上げます。

本稿は、平成22年度に大阪大学大学院に提出した修士論文の一部を、その後の調査・研究の進展を踏まえて加筆・修正したものです。修士論文作成時は、福永伸哉先生、高橋照彦先生よりご指導いただくとともに、寺前直人先生ほか、多くの研究室の先輩・同輩・後輩にお世話になりました。また、以下の方々・機関には、資料見学等に際し格別のご高配を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。

岩本崇、奥村清一郎、勝部智明、加藤晴彦、神谷伊鈴、守岡利栄、山崎修、雲南市教育委員会、京都府立丹後郷土資料館、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター、島根県立古代出雲歴史博物館、島根大学法文学部考古学研究室、鳥取県立博物館、鳥取市教育委員会、文化庁、与謝野町教育委員会

註

- (1) 古墳時代前期の山陰地域を中心に見られ、円筒形の器形を有し、底部は脚部を有するもしくは裾広がり形態をとり、口縁部や体部上半に山陰地域に多く見られる羽状文や竹管文といった文様が施文される土器群は、今まで円筒形土器や山陰系特殊埴輪、山陰型特殊器台型埴輪と様々な名称で呼ばれている。本稿では研究史上で触れる場合を除き、円筒形器台という呼称を用いる。
- (2) 円筒形器台の成立について、吉備型特殊器台からの影響を想定する点はおおむね研究者間の共通理解となっているように思われるが、奥山は、特にその中でも口縁部、底部断面形状の類似から向木見型特殊器台からの影響で円筒型器台の最古型式が成立したと考えている（奥山2010）。しかし、向木見型特殊器台は、山陰地域で今のところ出土しておらず、スカシ孔の形状などからも直接的な祖型とは考えにくい。出雲市西谷3号墓などで実際に出土しており、スカシ孔の形状といった属性に共通性が見出せる立坂型特殊器台の方が祖型として相応しいと考える。ただし、現時点で円筒形器台の初例とみられる徳楽方墳の資料と立坂型特殊器台が出土した西谷3号墓の間には、複数の土器型式を含む時期差がある点には注意を要する。
- (3) 廣瀬の円筒埴輪編年Ⅱ期は、主に底部高と突帯間隔の関係によって古相と新相に細分される。しかし、本稿で対象とする地域の資料は、廣瀬の編年の基軸となっている大型品が少ないため適用が難しい。そのため、本稿ではひとまずⅡ期の細分は採用せずに論を進めたい。

引用・参考文献

- 石野博信 1976 「5. 特殊埴輪」『纏向』桜井市教育委員会、奈良
- 岩本 崇 2018 「副葬品と埴輪による前期古墳広域編年」『前期古墳編年を再考する』六一書房、東京

- 宇垣匡雅 1984「特殊器台形埴輪に関する若干の考察」『考古学研究』第31巻第3号 考古学研究会、岡山
- 大澤正吾 2010「前期古墳における土器の配置・配列の展開と龍子三ツ塚1号墳」『龍子三ツ塚古墳群の研究』大手前大学史学研究所、兵庫
- 奥山 貴 2010「円筒形器台と古墳時代前期の地域間関係」『龍子三ツ塚古墳群の研究』大手前大学史学研究所、兵庫
- 金澤雄太 2018「古墳時代前期における埴輪受容過程の一樣相—讃岐の事例を対象に一」『待兼山考古学論集Ⅲ』大阪大学考古学研究室、大阪
- 川原和人 2014「出雲地方における前期古墳について」『古代文化研究』第22号 島根県古代文化センター、島根
- 佐藤晃一 2000「埴輪の成立と変遷—丹後型円筒埴輪の分布と背景—」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』季刊考古学・別冊10 雄山閣、東京
- 高橋克壽 1997「三大古墳と埴輪」『第3回加悦町文化財シンポジウム 徹底検証 日本海三大古墳がなぜ丹後につくられたのかその謎に迫る』加悦町・加悦町教育委員会、京都
- 田中彩太 1982「特殊円筒棺の諸問題」『古代文化』第34巻第7号 古代学協会、京都
- 辻川哲朗 2008「京都府・加悦谷古墳群における埴輪生産の展開」『日本古代手工業史における埴輪生産構造の変遷と技術移転から見た古墳時代政治史の研究』2005～2007（平成17～19）年度科学研究費補助金「基盤研究B（2）」研究成果報告書 東京国立博物館、東京
- 辻川哲朗 2017「丹後・岩滝法王寺古墳出土埴輪の再検討」『埴輪論叢』第7号 埴輪検討会、奈良
- 椿 真治 2008「出雲東部地域における埴輪出土古墳・中期後半を中心として」『古代文化』第59巻第4号 古代学協会、京都
- 東方仁史 2006「因幡型円筒埴輪について」『鳥取地域史通信』2006-4 鳥取地域史研究会、鳥取
- 東方仁史 2010「山陰東部における埴輪の導入と展開」『円筒埴輪の導入と画期』中国四国前方後円墳研究会、愛媛
- 東森市良 1967「山陰地方発見の壺棺とその特色」『考古学研究』第14巻第2号 考古学研究会、岡山
- 東森市良・大谷晃二 1999「山陰の円筒形土器について」『島根考古学会誌』第16集 島根考古学会、島根
- 廣瀬 覚 2015『古代王権の形成と埴輪生産』同成社、東京
- 福永伸哉 2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会、大阪
- 藤田憲司 2006「神原神社古墳と山陰の前方後円墳時代初期墳丘墓」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター、大阪
- 古川 登 1988「円筒形埴輪の成立」『福井考古学会会誌』第6号 福井考古学会、福井
- 松山智弘 2018「山陰」『前期古墳編年を再考する』六一書房、東京

挿図出典

図 1 ～ 5 筆者作成

図 6 ・ 7 各報告書より転載

表 1 筆者作成